

2007年の大雨

7月2日から17日にかけて、沖縄地方から東北地方にかけて記録的な大雨

1. 概要

平成19年の梅雨入りは九州南部を除いて平年より遅く、梅雨明けは南西諸島や九州南部を除いて遅かった。

梅雨前線は、6月中旬にかけて南西諸島から本州の南海上に位置することが多く、活動が活発となった。その後は本州付近に停滞することが多く、7月中旬にかけて引き続き活動が活発だった。

梅雨時期の降水量は、西日本から東日本の太平洋側や東北南部で多く、九州南部ではかなり多かった。奄美、九州北部、東北北部では少なかった。6月中旬にかけて梅雨前線が本州の南海上に離れて停滞することが多く、四国や九州北部の降水量がかなり少なかった一方で、沖縄では降水量が平年より多くなった。7月は梅雨前線が本州付近に停滞し活動が活発になったことや台風第4号の影響により、西日本から東日本の太平洋側で降水量がかなり多くなった。

また、9月中旬には台風第11号の影響により東北地方に停滞する前線の活動が活発となり、東北北部を中心とする大雨があった。

2. 主な大雨

ここでは、人的被害や社会活動に影響をもたらした大雨について、気象と災害の状況をまとめた。ただし、台風によるものは、別途、「台風」で記載した部分を参照のこと。なお、降水量を記載する際の観測地点名は、都道府県名、市町村名及び地点名（地点名が市町村名と同じ場合は省略）とした。被害状況については、主に気象庁が取りまとめた資料によるが、一部、総務省消防庁等発表の資料も使用した。また、負傷者等の数には風等を原因とするものも含まれる。

(1) 6月11日～20日：沖縄地方、西日本<梅雨前線>

南西諸島から西日本の南海上付近に停滞した梅雨前線の活動が活発となり、沖縄地方を中心に九州地方、四国地方、近畿南部、東海地方で大雨となった。

6月11日から12日にかけて、東シナ海の梅雨前線の低気圧が南西諸島に進み、沖縄地方や九州南部・奄美地方で日雨量が100 mmを超える大雨となった。13日から15日には、南西諸島から本州の南海上にのびる梅雨前線を低気圧が東進したため、九州地方から東海地方にかけて大雨となり、15日は鹿児島県錦江町田代で1時間雨量93 mmの猛烈な雨が観測された。16日から20日には、梅雨前線が南西諸島から西日本の南海上に停滞し、18日は和歌山県白浜町南紀白浜の24時間雨量が263 mmとなるなど、沖縄地方、九州地方、四国地方、近畿南部で大雨となった。

このため、沖縄県を中心に土砂災害や浸水害等が発生した。

(2) 6月21日～30日：西日本、北陸地方、東北地方<梅雨前線>

梅雨前線が九州から本州南岸にかけて停滞し、前線上に発生した低気圧が日本海を東に進むなどして、九州南部と中国地方から東北地方にかけての日本海側を中心に大雨となった。

6月21日に日本海にある梅雨前線の活動が活発となり、22日から23日にかけて九州南部までゆっくりと南下した。22日には日雨量が鹿児島県錦江町田代で222 mm、長野県王滝村御嶽山で128 mm、23日には鹿児島県十島村中之島で178 mmなど、奄美地方と西日本から東日本の一部で日雨量が100 mmを超える大雨となった。24日には、梅雨前線が九州北部まで北上し、西日本の広い範囲と東海地方の一部で大雨となった。25日から27日にかけては、梅雨前線が九州南部から本州南岸に停滞し、低気圧が日本海を東に進んだため、九州地方、北陸地方、東北南部で大雨となり、26日は鹿児島県南大隅町佐多で229 mm、27日には鹿児島県南さつま市加世田で205 mmとなるなど、鹿児島県で日雨量が200 mmを超えた。29日から30日には、前線を伴った低気圧が日本海を東に進み、東日本から東北地方の一部で大雨となった。

このため、九州地方、中国地方、北陸地方、東北地

方では、土砂災害や浸水害、また、農業・林業被害や交通障害が発生した。

(3) 7月2日～17日：沖縄地方から東北地方<梅雨前線、台風第4号>

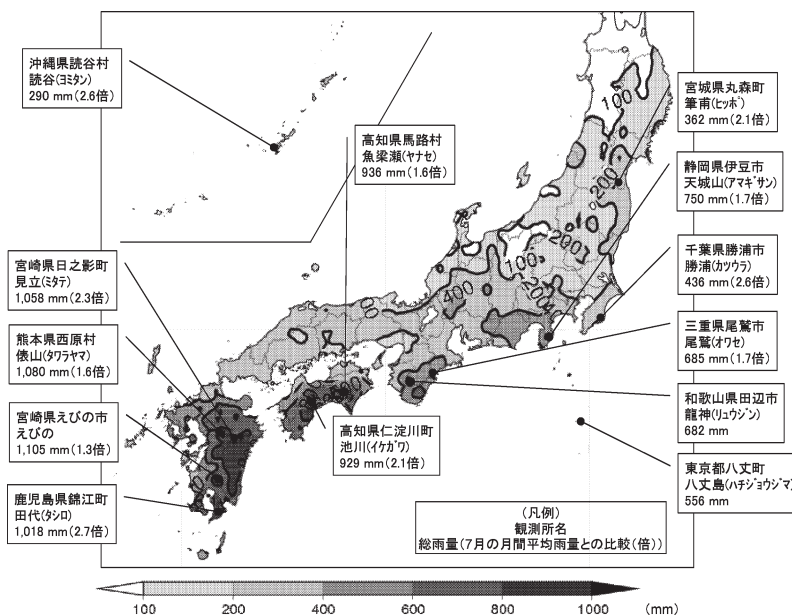
7月2日から17日にかけて、日本付近の梅雨前線の活動が活発となった。特に、13日から16日にかけては九州に上陸して本州南岸に沿って進んだ台風第4号の影響も加わり、沖縄地方から東北地方にかけての広い範囲で記録的な大雨となった。この期間の総雨量は大雨となった各地で7月の月間平均雨量の2倍を超えた。第1図に総雨量分布図を示す。

2日から12日にかけて、九州から本州付近にのびる梅雨前線の活動が活発となり、鹿児島県や熊本県を中心とした九州地方から東北地方の各地で大雨となった。3日には鹿児島県枕崎市の日雨量が7月の月間平均雨量を超える347 mmに達し、6日から7日は熊本県を中心して大雨となり、7日には熊本県甲佐町の24時間雨量が観測史上最大の324 mmとなった。11日は鹿児島県南大隅町佐多の24時間雨量が7月の月間平均雨量を超える353 mmを観測した。

13日から16日のはじめにかけて、台風第4号と、台風の影響で活動が活発となった梅雨前線により、西日本から東日本の太平洋側を中心に大雨となった。また、台風が接近・上陸した沖縄・奄美から東日本にかけての太平洋側では暴風となり、沖縄本島近海から四国沖にかけては猛烈なしけとなった。さらに、沖縄本島や瀬戸内海の一部では高潮が発生した。

西日本では、16日から17日にかけて再び梅雨前線の活動が活発となり、奄美地方、四国地方、近畿地方の一部で大雨となった。

この期間、大雨で増水した河川への転落などにより、西日本を中心に死者6名、行方不明者1名となり、沖縄地方から東南北部で土砂災害、浸水害、住家損壊が発生した。住家被害は全壊26棟、半壊、一部損



第1図 総雨量分布図 (期間：7月2日～7月17日)。

壊を合わせて244棟、床上浸水420棟、床下浸水2,993棟となった(集計期間 7月3日～17日)。また、農業・林業・水産業被害や鉄道の運休、航空機・フェリーの欠航などによる交通障害が発生した。

また、愛知県豊田市では、12日に藤田スケール^(注)F1と推定される突風(ダウンバースト)が発生し、負傷者1名、住家一部破損21棟などの被害があった。

(4) 8月10日～12日：沖縄県<大気不安定、熱帯低気圧>

8月10日に東シナ海で熱帯低気圧が発生し、12日にかけて東シナ海から黄海を北上した。沖縄本島地方は、熱帯低気圧の周辺に沿って南シナ海から流れる湿った南西風と、太平洋高気圧の縁に沿って流れる湿った南東風の合流する地域となり、10日から12日にかけてこの状況が継続した。

沖縄本島地方や宮古島地方は大雨となり、総雨量は沖縄本島地方の多いところで400 mmを超え、沖縄県

(注) 藤田スケール：竜巻やダウンバーストなどの風速を、構造物などの被害調査から簡便に推定するために、シカゴ大学元教授の故藤田哲也氏により昭和46年(1971年)に考案された風速のスケールで、F1は、風速33～49 m/s(約10秒間の平均風速)の強さを表す。

那覇市で497 mm、沖縄県座間味村慶良間では443 mm などとなった。また、24時間雨量は、11日に沖縄県那覇市で433 mm、沖縄県座間味村慶良間で374 mm などとなり、慶良間では観測史上最大となった。

この大雨により、土砂災害や浸水害が発生し、住家への浸水は床上浸水141棟、床下浸水410棟となった。また、航空機や離島便などの船舶の欠航が発生した。

(5) 8月27日～31日：西日本，東日本，東北地方<前線，熱帯低気圧，竜巻>

8月27日から29日にかけて、朝鮮半島から本州付近に停滞した前線に、華中から対馬海峡に進んだ熱帯低気圧の周辺の温かく湿った空気が流れ込み、前線の活動が活発となった。30日から31日には、熱帯低気圧から変わった温帯低気圧が、山陰沖の前線上を東に進んだ。

西日本から東北地方の日本海側を中心に大雨となり、この期間の総雨量は長崎県，島根県，鳥取県，石川県，新潟県で200 mm を超え、長崎県対馬市美津島で365 mm，島根県隠岐の島町西郷で292 mm，鳥取県大山町塩津で280 mm，石川県輪島市輪島で276 mm などとなった。

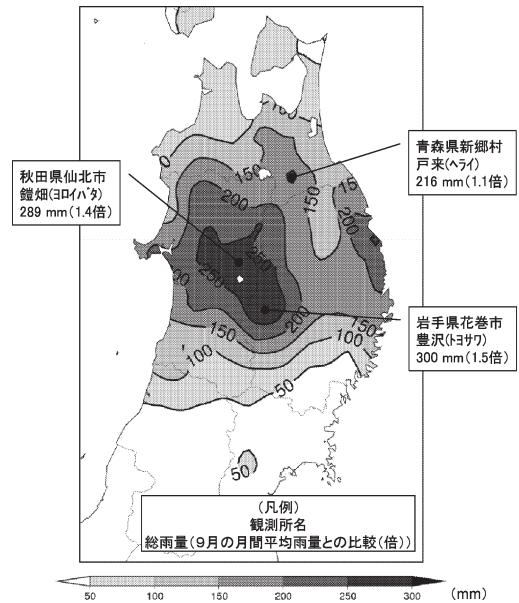
各地で土砂災害や浸水害，農業被害等が発生し，鉄道の運休による交通障害もあった。特に，島根県では隠岐を中心に床上浸水153棟，床下浸水390棟，新潟県で床上浸水13棟，床下浸水95棟などの被害が発生した。

また，徳島県徳島市では，29日に藤田スケール^(注) F1と推定される竜巻が発生し，住家一部損壊7棟や，ビニールハウス損壊などの被害が発生した。

(6) 9月15日～18日：東北地方<前線，台風第11号>

日本海から東北付近に停滞した前線に，台風第11号周辺の暖かく湿った空気が流れ込んだため，9月15日から前線の活動が活発となり，18日には台風から変わった低気圧が日本海の前線上を東に進み，秋田沖に達した。

このため，15日から18日にかけて東北北部を中心に記録的な大雨となり，この間の総雨量は岩手県花巻市豊沢で300 mm，秋田県仙北市鐺畑で289 mm，青森県新郷村戸来で216 mm など，岩手県，秋田県，青森県の各地で9月の月間平均雨量を超えた。また，24時間雨量は岩手・秋田県内の合計23地点で観測史上最大と



第2図 総雨量分布図(期間：9月15日～9月18日)。

なった。第2図に総雨量分布図を示す。

秋田県，岩手県では，大雨で増水した河川への転落などにより死者3名，行方不明者1名となり，青森県，秋田県，岩手県では，河川が増水やはん濫などによる浸水害や土砂災害が発生した。住家被害は全壊5棟，半壊，一部損壊を合わせて223棟，床上浸水401棟，床下浸水1,053棟にのぼったほか，水稻等の冠水，果実の落果等，農業・林業・水産業被害が発生した。また，宮城県では河川が増水により床下浸水や農地の冠水による農業被害等が発生した。

(7) 11月11日～12日：北日本<低気圧，大気不安定>

11月11日から12日にかけて，上空に寒気を伴った低気圧が日本海から三陸沖へ発達しながら進んだ。この低気圧に日本の南海上にあった暖かく湿った空気が流れ込んだため，東北北部を中心に大気の状態が不安定となり，青森県や岩手県を中心とする北日本と，北陸地方の一部で大雨となった。この期間の総雨量は，青森県や岩手県の一部で250 mm を超え，24時間雨量は12日に青森県平内町大和山で255 mm，青森県青森市で212 mm など観測史上最大となった。また，東北北部から北海道地方の太平洋側では，波の高さが6 m

を超える大しけとなった。

このため、土砂災害や農業・林業・水産業被害が発生し、青森県では床上浸水146棟、床下浸水591棟、岩手県でも床下浸水が発生した。また、青森県、岩手

県、北海道で鉄道の運休や航空機・フェリーの欠航があった。

(気象庁予報部予報課)